りびんぐらいぶず 平成十二年六月十六日発行

◆天国はいらない、ふるさとがほしい

参考資料）六月六日付けの産経新聞正論「パトリオティズムの時代」、
インターネット「ナージャの村」

なんという新鮮な言葉だろう。
理想の世界はいらない。
ただ帰ってゆけるふるさとがほしい。
ふるさとは郷土、生まれ育った土、
草木も人間も生まれたところで育ち、やがて、土に帰る。
土こそは、わがふるさと、
そのふるさとさえあればよいとする。
今から十四年前の一九八六年の四月、
チェルノブイリ原子力発電所で爆発事故が起った。
地球の北半球全域が放射能汚染にさらされた。
気流の関係で、特に高濃度に放射能に汚染した地区（ホットスポット）では、
政府による立ち退き要請が下った。
チェルノブイリから百七十キロも離れたドウヂチ村もその一つ。
三百家族というから丁度北小松位の規模の村に当たる。
ところが、村の住民殆どが移住した後に、
頑として六家族だけが残った。
経済的な理由もあるが、何よりもふるさとを離れることが身を切るよりも辛かったのだ。
その一人、ニコライ老人が「なぜ、放射能に汚染された村に、住み続けるのか」と問われて応えた言葉が冒頭の
「**天国はいらない、ふるさとがほしい**」という「エセーニンの詩」の一節だった。

ドキュメンタリー「ナージャの村」は、昨年日本の写真家本橋成一さんの初監督作品としてでき上った。
広い大地の上で自然と共に生きる人々の生き様を描いた作品は、
「記録映画」というよりは「物語映画」と言った方が似つかわしい。
村人の日常は、存在感に満ち、
一つ一つの言葉は、詩の一節となり、
老人が奏でるアコーディオンの一曲一曲は、
彼自身の長い人生を歌い上げる。
頑固に残った殆どが老人世帯である中で
一家族ウラジミール家だけには五人の子供達が居る。
一番下の八歳の少女はナシェージダ
後にこの子の愛称を採って
映画のタイトルは「ナージャの村」となる。
夏、姉妹は森にキノコ狩りにでかける。
キノコは食べてはいけないことになっているが、
みんなはキノコが大好きで、瓶詰めにして保存食にする。
町に仕事のない父さんだけを残して、
新学期には学校のある町に家族が引っ越す。
引っ越す前の日、

姉妹は、村はずれの川に夕陽を見に行った。
秋、村の墓地、
見渡せば、真新しいお墓が増えている。
移住はしても、死んでようやく故郷に帰ってきたのだ。
母親の一周忌をすっかり忘れていたボクサー
村人たちにせき立てられるように
一周忌のためのお墓掃除に取りかかる。
一周忌には、村人たちが墓前でこぞって、故人を偲ぶ。
八十二歳のチャイコ婆さんはどこにいくにも山羊のシロと一緒、
そのシロが死んですっかり落ち込みながらも、
「暖かくなったらジャガイモを植えよう。
 命について考えよう。
 この冷たい土の中には
 たくさんの命が待っているんだからね」と
希望に満ちた未来を語る。
(後書き) 写真家、本橋さんの哲学は「写真は、人間関係だ」という。
その写真が、歴史が近代化を迎える以前、およそ、地球上の郷土に息づいて居たなつかしい生き様を捉える。
故郷に支えられ、故郷に生かされる生き様、
その故郷を自分たち自身の手で守ろうとする心こそ愛郷心(パトリオティズム)に他ならない。
「パトリ」とは、郷土の神、
「パトリア」とは、種族発祥の地、故郷、
「パレンタス」とは、先祖、血縁をいう。
同朋を含み、家畜や樹木までも含んだ土地の自然と伝統。
人間にとって根っこを張る大地そのものだと言って良い。
なんのことはない、古来、日本人の誰もが故郷の神さまと呼んできたものだった。
日本の場合、そのふるさとの神さまが、仏教を受け入れ、いつしか日本独自の浄土教に高まった。
「南無阿弥陀仏」と称えるだけで、私達がわけへだてなく迎え取られる故郷を教えた。その名を「浄土」という。
「浄土」は、私達が、終に、帰り行くことのできる「土(ど)」
だから「浄土」と言うのだった。
その「浄土」が、自らの存在を衆生(私)に知らしめる御手立てが
「お名号」だった。
何もかも仕立てて手向けられ、
ただ「南無阿弥陀仏」と称えよとご本願が呼びかけて下さる。
だから私は「南無阿弥陀仏」と称えるのだ
すると、遥かな世界、浄土が私を包んで姿をあらわす。
私達に賜った、ついのふるさとの頼もしさ。合掌

(ご案内)‥念仏の声を世界へ子や孫に‥

◆正覚寺仏教壮年会例会　毎月第一日曜午後八時より
◆正覚寺仏教婦人会例会　毎月十六日午後七時より

著作編集兼発行元　りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派　正覚寺内)
〒520-0501 大津市北小松四五二番地 **☎&Fax077-596-0166**　住職　堅田 玄宥
http://syohgakuji.web.fc2.com/ E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp